

学校教育に関する学生意識の調査研究

—小学校・中学校・高等学校の教師の対応が及ぼす影響を考える—

筑波大学附属駒場中・高等学校

根本節子

共同研究者

喜納倭子 成徳学園中学高等学校

白井利明 青梅市立第二中学校

中島玲子 拓殖大学

吉田 稔 駒場東邦中学高等学校

学校教育に関する学生意識の調査研究

—小学校・中学校・高等学校の教師の対応が及ぼす影響を考える—

筑波大学附属駒場中・高等学校

根本節子

共同研究者

喜納倭子 成徳学園中学高等学校

白井利明 青梅市立第二中学校

中島玲子 拓殖大学

吉田 稔 駒場東邦中学高等学校

要旨

大学生を対象に、小学校・中学校・高等学校時代に教師がどのように接したか、その与える影響についてアンケート調査を行った。

「教師は子どもの気持ちをよく分かろうとしてくれた」と回答した学生は小学校・中学校・高等学校時代の学校生活のあらゆる場面で満足感を持ち、かつ大学生生活も充実し、卒業後にも社会で役に立ちたいと言う回答が多く、 χ^2 検定で有意差が認められた。また、教師の言葉で励まされたり、傷ついたりした事についての自由記述からも貴重な示唆を得た。

キーワード：学校生活 意識調査 満足度

1. 研究の目的

大学生の基礎学力の不足や学問に対する態度について、多くの意見や批判を聞くようになって久しい。そこで大学生の実態を調査・分析して小学校・中学校・高等学校時代の教師の接し方が生徒に与える影響について考える。

2. 研究の内容と方法

大学生の実態を客観的に把握するために幼年期、少年期の親や教師のかかわりについて、複数大学の1130名の学生に質問紙調査(2001.1)を行い、その結果を分析検討した。また、質問紙調査を補完する目的で63名の学生に面接調査(2001.5)を行った。

3. 研究の結果と考察

(1) 質問紙調査による全体傾向
大学の選択の動機は、学部への興味関心が60%以上で

自分の意志を大事にしていた。大学決定にあたっては、自分の身近な家族(51%)や高校の教師(18%)の意見を参考にしていた。

大学に通う意義については、将来の生活や人生に直接影響のある専門的知識・学歴や資格・職業的技能的修得(73%)等、実利的な意義を挙げている学生が多い。大学への満足度は「どちらともいえない」が38%、「満足」と「やや満足」が28%、「不満」と「やや不満」が33%で、大学生生活の満足度は余り高くなかった。

(2) 親の養育態度の与える影響について

①「過去に親からほめられたり励まされたりしたことがありますか」という問いに対して「よくあった」と回答したのは30%、「ときどきあった」と合計すると、親からほめられて育ってきた学生は82%を越していた。一方で、「あまりなかった」(男18%・女13%)、「まったくなかった」(男4%・女2%)を合わせると男子の22%はほめられた体験をあまりしていないことがわかった。

ほめられる中身に関しての面接調査では、家事手伝い・母への気遣い・学校の成績・コンクールなどの入賞等が挙げられていた。

②小学校を振り返って「親は、早くしなさいと注意することが多かったと思いますか」という問いについて、「そう思う」は21%、「そう思わない」も22%であり、肯定回答の合計は約45%、否定回答の合計は約53%でほぼ二分されていた。

面接調査で親の注意について質問したが「早くしなさい」という言葉かけが、励ましになるのか、自主性を摘み取ることになるのかは個人によってそれぞれであった。

③「親は、悪いことをした時にはきつく叱ったと思いますか」という問いに対して、「そう思う」は57%、「どちらかというと思う」との合計は86%以上であった。しかし悪いことをした時に、親に叱られなかった学生が11%を越えていた。面接調査で尋ねたところ、叱られることがわかっていてから悪い事をしなかったという回答があった。

親の養育態度については、1999年に部活動や学校行事、授業に意欲的に取り組んでいる駒場高校50期生（1年生）の保護者8名に面接調査をし、面接によって得られた保護者の関わりかたや姿勢などを分析検討したところ、以下の結果が得られている。

（ア）自立心・自律心を養うことに該当する回答は84件あった。手をかけすぎない、年齢相応の付き合い方を、など親自身の姿勢や態度に関するものが45、自己否定をしないたくましさを身につけさせる、自己管理・自己コントロールを身につけさせる、など子ども自身の生き方に関するものが19、道徳的に悪いことをしたときには厳しく叱る、社会的な役割・善悪・犯罪の否定等を繰り返し話す、などしつけに関するものが15あった。その他自分探しが遅れている、安易に流れる、身につけるべき課題ができていない、など高校1年生という年齢がまだ発達途上にあることを伺わせるものが5であった。

（イ）「家にいるとゆったりできる」と思える家庭の雰囲気づくりに関する回答は50件あった。子どもが家庭にいるとき可愛い、愛している、嬉しいと口に出して伝えるが8、見守る、口出し手出しをしないが8、子どものやることや子どもの世界に付き合う、一緒に楽しんだり驚いたりするが8、子どもの世界や時間を尊重する、邪魔をしない、中断をしないが6、親の考えや都合を押しつけないが3、根ほり葉ほり聞かないが3、その他が14であった。

（ウ）家庭円満に関する回答は22件で、風通しをよくする、両親が仲良くする、相手を無視しない、など夫婦に関することが15、優しい父親である、客観的に見て子煩悩な父親である、など父親に関するものが4、子どもと一緒に遊ぶ、子どもを中心にして会話をする、など子どもに関するものが3であった。

（エ）父親の子育てに関する回答は19件で、時間がとれると子どもといたがる、子どもの喜びそうなことを見つける、大人として対等につき合っている、など子どもと直接関わるが13、子どものやりたいことを見守る、離れて見ている、口うるさく干渉しない、など子どもと距離をおいた関わりも見られた。

（オ）父親の関わる時間の少なさについての回答は9件で、母親が父親の立場を理解できるように話してきた、家族が父親の忙しさを当然として受けとめている、家族で共通の趣味をみつけている、母親が家族旅行を計画、など全員の母親が父親の忙しさをカバーしたりフォローしていることが注目された。

（カ）これからの子育てで大事にしていくことに関しては一人一言で述べてもらった。一心同体の部分を残しながらも上手な子離れをするが3名、両親が見守っていることが自然にわかる家庭にするが2名、どんなことがあってもあなたのことが大好きなのよとメッセージを送るが2名、何かあったときに振り返れば親がいるよと伝えるが1名であった。

今回の面接に応じてくれた保護者は全員が「あなたのことを愛している」「あなたのことが大好き」と子どもに伝えていと語っていた。自立や自律のためには、ただ単に指示をしたり、押しつけるのではなく親の愛情を十分に伝えつつ温かく見守り、失敗をおそれずに経験させることを意識的に行っていた。子どもの意欲を上手に引き出すためには、親と一緒に楽しくたり悲しんだりしながら環境を整えて待つ姿勢を大事にしていた。また、道徳的に悪いことをしたときには厳しく叱るが失敗をケアして追いつめない、のように子どものプライドを否定しない配慮がなされていた。父親の関わり方や関わる時間の少なさについては、母親自身が父親を尊敬している、家族が父親の立場を理解している、など母親が父親不在にならないように工夫していた。このように保護者との面接では、子育てに母親が果たす役割の大きさが痛感された。

以上のことから、我々が成長の目安としてきた、自立や自律、自己有用感、将来への展望、心身の安定、生活に対する充実感などを感じさせる生徒は、両親の愛情を十分に受けているという知見を得た。子育ては、

関わる者の愛情を伝えることにその基本があると思われる。

4. 教師の接し方の与える影響について

(1) 子どもの気持ちをよく分かろうとする大切さ

子どもたちが学校で最も影響を受けるのが、小学校では担任、中学・高校では、担任だけではなく教科担任や部活動の顧問であると考えられる。授業その他で接する全ての教師と良好な関係を保つことは無理にしても、信頼できる教師が一人でも二人でも存在するということが、子どもの学校生活に大きな影響を与える。

今回の調査では、学生が小・中・高校時代をどのような思いで過ごしてきたのかに焦点をあて、調査項目は「教師は、子どもの気持ちをよく分かろうとしてくれたと思いますか」(小・中・高校時代をそれぞれ振り返って)の一つに絞った。予想されたことではあるが、学年があがるにしたがって、「教師に、子どもの気持ちをよく分かろうとしてもらえなかった」と感じている。

「教師が子どもの気持ちを分かろうとすることが、子どもにとってどのように影響しているのか。このことについて検証するために、「教師は子どもの気持ちをよく分かろうとしてくれたと思いますか」に対する回答と、「進路指導に対する満足度」「生活指導に対する納得度」「学校生活に対する楽しさ」がどのように関連しているのかを調べた。

(2) 教師が、子どもの気持ちを分かろうとした場合

中学校時代「教師は子どもの気持ちを分かろうとしてくれましたか」という問いで「そう思う」と回答した学生は、246名(22%)である。その学生たちの進路指導についての満足度をみると、56%が満足したと思っている(全体では28.2%しか満足したと思っていない)。反対に満足していなかったのは、わずかに2.4%である(全体では12%が進路指導に満足していなかったと回答している)。このことは、「生徒指導についての納得度」「学生生活が楽しかったか」の回答も同じ傾向であった。

高校時代は「教師は子どもの気持ちをわかろうとしてくれましたか」に243名(22%)が「そう思う」と回答している。その学生たちの「進路指導についての満足度」をみると、59%の学生が満足したと思っている(全体では27%しか満足したと思っていないにもかかわらず)。反対に、全体では15%が進路指導に満足していなかったと回答しているのに対し、満足してい

なかったのはわずかに5%であった。このことは中学時代と同じで、「生徒指導についての納得度」「学校生活が楽しかったか」の回答も同じような傾向であった。

以上のことから、教師が子どもの気持ちをよく分かろうとすることが、子どもにとって学校生活を肯定的に受けとめ、進路指導や生活指導についての理解を深めることにつながり、学校生活を楽しく充実させることとも結びつくと考えられる。

(3) 教師が、子どもの気持ちを分かろうとしなかった場合

中学時代、「教師は、子どもの気持ちをよく分かろうとしてくれましたか」という問いに対して、151名(13%)が「そう思わない」と回答している。表からも分かるように、その学生たちの「進路指導についての満足度」をみると、46%もが満足していないと回答している(全体では12%しか不満を表していないのである)。反対に、進路指導に満足していたと回答した学生は、わずかに14%である(全体では28%が満足していたと回答している)。このことは、「生徒指導についての納得度」「学校生活が楽しかったか」の回答も同じ傾向であった。

高校時代は、167名(15%)が、「そう思わない」と回答している。その学生たちの「進路指導についての満足度」をみると、52%もの学生が、満足していなかったと思っている(全体では15%しか不満の態度を表していない)。反対に、進路指導に満足していたと回答した学生は、わずかに10%である(全体では27%が満足していたと回答している)。この場合も、「生徒指導についての納得度」「学校生活が楽しかったか」の回答も同じことが言える。

以上のことから、教師が子どもの気持ちを分かろうとしなければ、適切な進路指導や生徒指導が難しいと言える。

(4) 小学校時代に子どもの気持ちを分かろうとするものの意味

小学校時代に「教師は、子どもの気持ちをよく分かろうとしてくれたと思いますか」という項目と「学校生活は楽しかったと思いますか」という項目をクロス統計して見ると、教師が子どもの気持ちを分かろうとすることと学校生活が楽しいことが大いに関連していることが分かった。

感じやすい小学校時代こそ、教師には、子どもの気持ちを本当に分かろうとする努力が求められていると言える。

(5)大学生生活にも影響を及ぼす中・高校時代の教師の対応

表1は中・高校時代に「教師が子どもの気持ちを分かろうとした場合」に、進路指導、生徒指導、学校生活についてどのように感じていたのか、また、大学生になってからの様子や感じていることとの関連がどの程度あるかを χ^2 検定し、その有意差を調べたものである。

表1「教師は子どもの気持ちを分かろうとしてくれた」場合

	中学時代	高校時代
進路指導について満足していたと思う	☆☆☆	☆☆☆
生活指導について納得できたと思う	☆☆☆	☆☆☆
学校生活は楽しかったと思う	☆☆☆	☆☆☆
授業中教師の話を楽しみに聞いている	☆☆	☆☆☆
社会のために役立つ人になりたいと思う	☆☆☆	☆☆☆
大学生生活は充実していると思う	☆☆☆	☆☆☆

χ^2 検定 ☆ $p<0.05$, ☆☆☆ $p<0.001$

表から分かるように、教師が子どもの気持ちをよく分かろうとすることが、中・高校時代を楽しく過ごせ、進路指導や生活指導について満足することに結びついている。また、そのことが大学生生活での授業態度や生活に対する充実感、社会に対する積極的な態度にも影響を及ぼしていることが明らかとなった。

(6)楽しい学校生活が送れるように

子どもたちにとって、「学校生活は楽しい」と思える学校でありたいものであるが、実際には小・中・高校時代とも50%台の学生しか「学校生活が楽しい」とは感じていない。

小・中・高校時代に「楽しい学校生活」を送ることが、大学生生活や将来の生き方に影響を及ぼしている可能性があるのではないかと考え、小・中・高校時代に「学校生活が楽しかった」と感じて大学生になった場合、「授業中教師の話を楽しみに聞いている」「社会のために役立つ人になりたい」「大学生生活は充実していると思う」の3項目とどのような関係になるかについて χ^2 検定し、その有意差を調べたのが表2である。

表2 小・中・高時代に「楽しい学校生活」をおくれた場合

	小学	中学	高校
授業中教師の話を楽しみに聞いている	☆☆	☆☆	☆☆☆
大学生生活は充実していると思う	×	×	☆☆
社会のために役立つ人になりたいと思う	×	☆	☆☆☆

χ^2 検定 ☆ $p<0.05$, ☆☆☆ $p<0.001$

表2の通り、「楽しい学校生活」をおくることが、大学生生活での授業態度、充実感、将来への展望にまで好ましい影響を与えることが裏づけられた。特に、高校時代に学校生活は楽しかったと思えることが大切である。

教育現場は年々忙しくなり、社会や家庭生活の変化に伴い様々な問題を抱えた子どもたちが増えてきている。より良い教育環境作りは勿論大切だが、それと同時に現在の困難な中でも、子どもの気持ちをよく分かろうと努力すること、子どもたちに楽しいと思える学校にすることが現在の教師に求められているのではありませんか。

5.励ます・傷つける 教師の言葉

「小学校から今まで教師の言葉で、励まされたことや傷ついたことがあったら、教えて下さい」という調査項目に自由に記述回答してもらい、その回答文を類似項目毎に集計した。質問項目は「励まされたこと」「傷ついたこと」と「その時期」である。

(1)これまでに教師の言葉に励まされたこと

① 類似項目別励まされたこと (グラフ1)

まずは、回答文に類似項目がどの様な割合で含まれているかを見る。円グラフは回答者174人中の人数の割合ではなく、すべての回答文を類似項目に振り分けて、その全体数の内、各々の項目が何%を占めているかを表している。

設定したどの項目も根底に通っているものは、およそ「愛されている」といった感覚に集約することができるが、[a一人ではないと感じられた]「b愛されている、大切にされていると感じられた」「c信頼に答えてくれた」「d認めてくれている、受け入れてくれていると感じられた」「e必要とされていると感じられた」の五つに分類した。

子どもたちは「愛されている」「大切にされている」

という教師の言葉や雰囲気を感じ取ることによって安心することができ、励みになるものと思われる。aの「一人ではない」という感覚も、子どもは励まされると答えている。行き詰まったり失敗したりして落ち込んだ時に、誰かが支えてくれたり見守ってくれていることで励まされている様子がうかがえた。また、cのように生徒が相談に行き助けを求めた時に、教師の誠意ある対応によって励まされたという声があった。eの項目だけが間接的で、直接に自分に対する「慈愛」が感じられるという訳ではないが、「自分は頼られている」という感じが励ましになるようである。

② 経験時期別励まされたこと (グラフ 2)

いずれの時期も b、dが多くなっている。小学生時代は「b:あなたは笑顔がいいわね」「d:字がきれい」等、直接かけられた言葉に励まされることが多い。中高生時代は「悩んでいるときに相談にのってくれ、いつも見てくれていた」「友人とのトラブルで悩んでいるときに、人のことよりも自分のことを大切にしないで」といってくれた」「自分自身の可能性を認めてくれた」等、自分をありのままに受けとめてもらえることに励まされている。

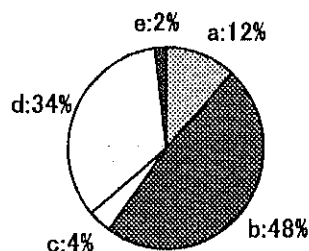
学校での教師の言動が生徒を励ますことになるか、傷つけることになるかは表裏一体である。生徒に接する際には常に「慎重さ」が要求されていると意識しておく必要がある。

(2) これまでに教師の言葉で傷ついたこと

① 類似項目別 (グラフ 3)

類似項目を「A 口等で精神的に、非物理的に自尊心を傷つけられた」「B 体罰・暴力・いじめ等で自尊心を傷つけられた」「C 外見・なまり等自分に責任のないこと・自分に責任のないこと・自由にならないことについて自尊心を傷つけられた」「D 信じてもらえなかった・理解されなかった・話を聞いてもらえなかった」「E 他人の前でさらされた・恥をかかされた」「F 優しいことなどが原因の間接的な傷・苦悩」「G 裏切られた・信頼できなかった・裏表を見せつけられた・非常識な理不尽さを感じた」「H その他」の8項目に設定した。

類似項目別励まされたこと (複数回答)



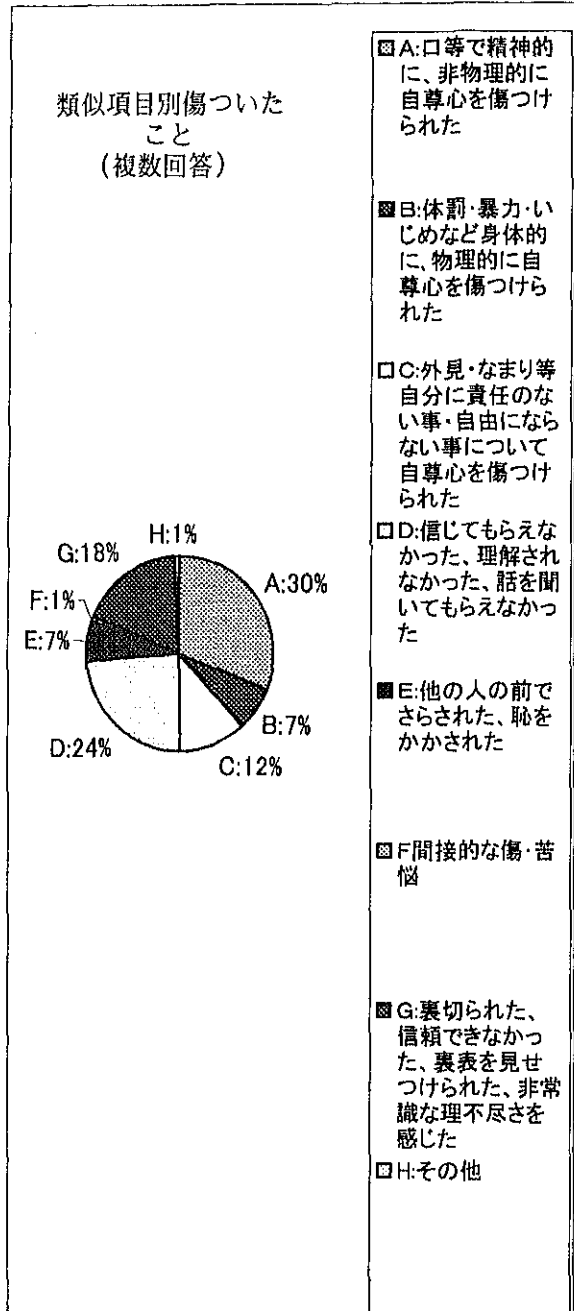
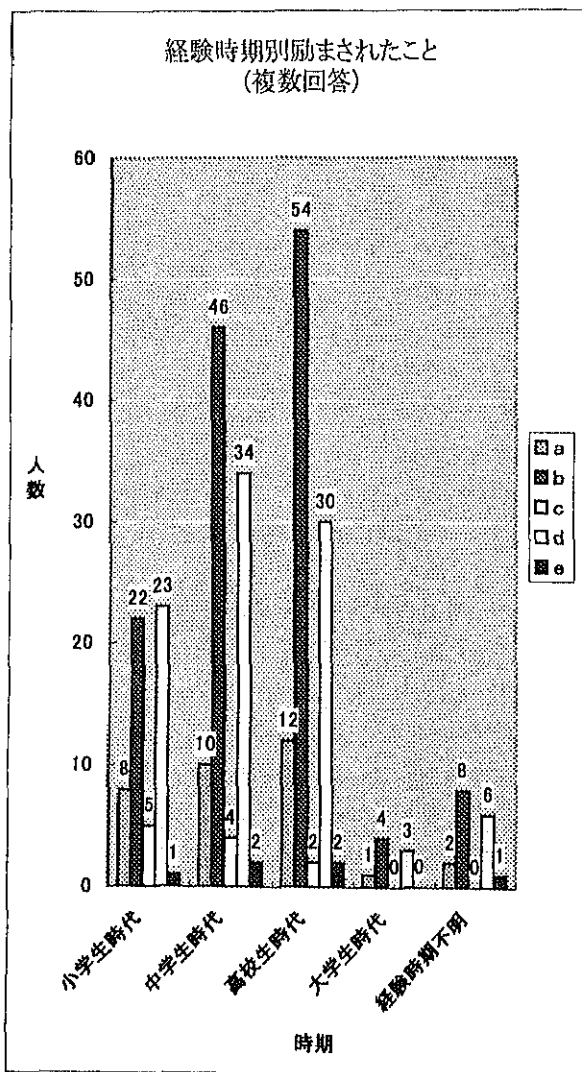
- a:一人ではないと感じられた
- b:愛されている、大切にされていると感じられる
- c:信頼に答えてくれた
- d:認めてくれている、受け入れてくれていると感じられた
- e:必要とされていると感じられた

Aの「口等で精神的に非物理的に自尊心を傷つけられた」が最も多い。今回の調査では、A・B・Cの様に直接「自尊心を傷つけられる」だけではなく、Dの「信じてもらえなかった・理解されなかった・話をきいてもらえなかった」、Gの「裏切られた・信頼できなかった・表裏を見せつけられた・非常識な理不尽さを感じた」の様に何らかの生徒のアプローチにもかかわらず、教師の対応の悪さによって間接的に傷つけられることが5割近くあった。Fの「間接的な傷・苦悩」のように「担任の体罰が厳しくて、そういうのを見ていて辛かった」という回答にみられるように、周りには生徒の存在も忘れるべきではない。特記したいのは、「がんばれ」という言葉で傷ついたという回答である。「がんばれ」という通常相手を励ます言葉でも、時には傷つける事になる。自分はこんなにかんがっているのに、もっとがんばらなければいけないのかと辛くなるのであろう。言葉をかける時には、

子どもの性格・状況・場所などに気を配る必要がある。

また、回答の中には、子どもの気持ちどころか子どもの人権まで踏みにじっているのではないかと思えるものが多数見られた。「名前をばかにして授業中に笑った」「中学受験は無理と皆の前で言われた」や「校長先生に胸を触られた」「中年男性教師に抱きつかれたりした」など常識を疑わざるを得ないものから、「騒がしかったのを怒られ、クラス全員で教師に土下座させられた」といった教師の見識を疑うような回答もあった。教師が生徒を叱るということはあるにしても、常識の範囲を守り、行き過ぎには自戒したいものである。

グラフ 2



②経験時期別 傷ついた事 (グラフ 4)

小学、中学時代は A,D,G が多く、高校では A がとび抜けて目立っている。

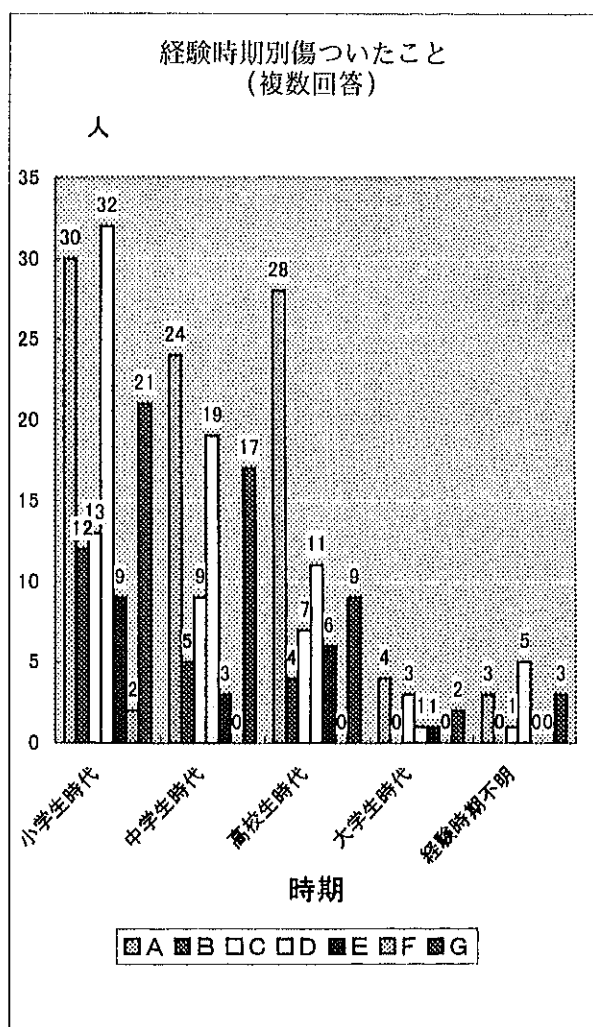
全体的には、年齢が低い程傷つくことも多い。たとえば言った側が冗談のつもりでも、言われた側の年齢が低ければ、必ずしも冗談として認識して受け取ってくれるとは限らない。他人が傷つくのを見て自分が傷つくは小学生時代でしか見られなかった。

AやCに比べれば少ないが、「先生が一方的にあたってきた、わけの分からない理由でなぐられた」「先生か

ら激しい暴力を受けた」「部活で監督にぼろくそなぐられ、嫌なことを言われた」などの様に「身体的に、物理的に自尊心を傷つけられる」子どもがいることにも目をとめたい。もともと身体的に傷つけるというのは許されるべき事柄ではないが、人数では175人中21人で12%を占め、決して少ない数ではない。

質問紙調査結果では、いわゆる体罰は小学生時代に最も多い。これに加えて「皆の前で飛べない縄跳びを1人だけでさせられた」といったような、人前でさらすというような要素が含まれているものもある。人前で笑いのものにされたら傷つくのは当然である。

グラフ4



(3)男女の傾向比較

Aの「口等で精神的に、非物理的に自尊心を傷つけられた」は女子に多く、Bの「体罰・暴力・いじめ等身体的に、物理的に自尊心を傷つけられた」は男子に多かった。Cは傾向には差がないが、これはほとんどが教師側の故意によるものと推測でき、教師自身や学

校の信用にかかわる問題である。Eの「他の人の前でさらされた、恥をかかされた」が、女子の方が多いのは、Bの物理的攻撃が男子に多く女子に少ないという代わりに、女子はさらされることによる精神的攻撃を受けることが多い。感受性の大きさも影響しているものと思われる。Gの「裏切られた、信頼できなかった、裏表を見せつけられた、非常識な理不尽さを感じた」は女子に多く、「教師がいじめを見て見ないふりをした」「いじめにあった時の教師のたよりなさひどかった」「いじめられている人をかばったら、一人だけ目立つとクラスの輪が乱れると言われた」等、いじめに関連した回答が女子に多かった。

6.まとめ

小・中・高校時代の教師の接し方が、それぞれの学校生活や大学での生活に影響を与えていた。

中・高校時代に「教師が、子どもの気持ちをわかろうとした場合」に、進路指導に対する満足度、生徒指導に対する納得度、学校生活に対する楽しさについて、 χ^2 検定で有意差が認められた。

教師が子どもの気持ちをわかろうとすることが、子ども自身のなかに分かってもらえている、見守られているという安心感や満足感となり、教師からの働きかけを素直に受け入れる事ができると考えられる。その結果、進路指導や生徒指導への理解も深められ、学校生活が楽しいという実感にも結びつくと思われる。

教師の言葉に励まされたことでは、小学生は直接かけられた言葉に励まされることが多く、中・高校生では自分をありのままに受けとめてもらえる言葉に励まされている。

教師の言葉で傷ついたことではチビ・ガリなど身体的なことや、いじめの加害者にされたり、暴力を受けたうえで嫌な言葉を言われたり、あるいは人前でさらすという要素のものもあった。

子どもを励ます言葉かけで大切なことは、子どもを大事にする態度と極当たり前のほめ言葉であり、傷つける言葉は人間として言うてはならないものであった。

以上の結果を重く受けとめ、教師が子どもの気持ちをよくわかろうとすること、子どもが楽しいと思える学校にすること、また、子どもを励ます言葉かけでは、ごく当たり前の誉め言葉を大事にして子どもと接していきたい。

<資料および参考文献>

今井五郎他「最近の中・高校生の傾向とその背景に関する研究」H10.3

総務庁青少年対策本部「非行原因に関する総合的研究調査」 H10.9

広木克行「子供が教えてくれたこと」

青木省三他「青年期精神科の実際」

斎藤 学「生きるのが怖い少女達」

岩佐壽夫「小学5,6年生の親として知っておくこと」